

湯ヶ島での梶井基次郎

右 遠 俊 郎

1

二十歳過ぎの頃、私はわけも分らずに初めて小説というものを書いてみた。それを近所に住む年上の文学青年に読んでもらい、「梶井基次郎の作品に似ている」などといわれて、私はほとんど狂喜した。私には、夏目漱石や芥川龍之介に似ているといわれるよりも嬉しかった。そのくせ私は梶井基次郎の作品をたいて読みこんではいなかった。

今から振りかえってみれば、そのときの私の小説など愚にもつかぬもので、だれの作品にも似ているはずはなく、年上の文学青年にしても、ちょっと気どってみせたにすぎないのだ。だが、彼の気どりと私の甘さを差し引いてもなお、一般的に若い心を魅了する何か、梶井基次郎の作品にはたしかにある。

たとえば、「今、空は悲しいまで晴れてゐた」（「城のある町にて」）とか、「冬陽は郵便受のなかへまで射しこむ」（「冬の日」）とかの文章に接すると、むろん前後の文脈のなかでそれらの表現は生きてくるのだが、ちょっとした文学青年ならだれでもかんたんに参ってしまうだろう。その印象派風な、感情を包みこんだ鮮明な映像はみごとというほかはない。そして、なるほど、梶井基次郎のいう「象徴主義」とは、こんな形をしているのだな、とその一端が分ったような気になる。

だが、今の私なら、「俗悪に対してひどい反感を抱くのは私の久しい間の癖でした。そしてそれは何時も私自身の精神が弛んでゐるときの徴候でした」（「椽の花」）という文章に、厳しく鞭打たれる思いがする。病む身に背負った強靱な精神による、仮借ない自己点検を私はそこに見る。反俗もまた俗悪と同じ水位にあると知って、さらに高い精神の飛翔を志すのだろう。とかく繊細な感覚と、精密な観察と、豊穡な空想とを喧伝されるこの作家の、これは毅然と直立する倫理性の一面を示しているとはいえないか。

久しぶりに梶井基次郎の作品を読みかえしてみても、私は改めていくつかのことを考えさせられた。その第一は、はなはだ大雑把なことだが、こんな作品ばかり書いていたのでは、たとい彼が肺結核でなかったとしても長生きはできないだろうな、という感慨であった。「こんな作品」というのは、密度の高い短編ということである。彼は人生を物語ろうとすることなく、直截に精神の在りかを示そうとする。そのゆえに、他の作家なら「肉付け」するところを、梶井はひたすら削る。ペンをのみのように持って、彼は文章を削り、身を削る。結果として、短編は彼の必然であり、短命もまた彼の必然であったろう。

第二に、いささか速断にすぎるけれども、梶井は私小説作家ではないだろう、ということである。私小説とは何かという規定の仕方

によって論は別れるだろうが、私はその特徴の一つとして、形而上的思考と社会的視野の欠除を考えている。その両者が、作品によるけれども、梶井のなかにはある。

もともと梶井文学の本質は、感覚と観察と想像のアマルガムによるリアリズムにある。彼のいう「象徴主義」にしても、現実の事象における象徴的選択の謂ではなく、現実を抽象化して観念的原質となったものに、もう一度典型的な形を与えることであったように思う。その前提に現実凝視がある。だからこそ梶井は、マルクス主義文学の現実主義に出会ったとき、一面では反発し一面では納得し、自分の「象徴主義」を、「資本主義的芸術の尖端リヤリストティック・シンボリズムの刃渡り」と修正しなければならなくなる。

第三には、書簡の文章のみごとさについてである。ただ一人の読者に限定されたとき、梶井は相手との距離感に安定を得るのであろう、そのまなざしは暖く、削ることもほどほどに、文章はすこやかに伸びている。そのまま短編小説として通用しそうなものもある。そうしてみると、梶井の作品のなかでも、「椽の花」とか「Kの昇天」など、手紙の形式を借りた作品には、文章に苦渋の跡があまり見られない。

だからといって、もちろん、実用の文章をただちに、虚構の文章に転用するわけにはゆくまい。「虚実が皮膜の間」であるとしても、その一皮、一膜が越えられないで、とくに梶井はそこにこだわって、実用の文章をひたすら削ることに苦慮するのである。

その苦慮が実ってか、あるいは、肺結核の悪化による衰弱のためか、梶井は晩年、諦念と達観のはざままで、しかし意欲的に「のんきな患者」を書く。ここにはもう「象徴主義」はおろか、「リヤリストティック・シンボリズム」もない。書簡の文章に近い穏やかなリズムの文章で、彼は市井の軒の下の人間の生活

をのぞきこむ。憂鬱や倦怠や孤独を形象化しようとはしないで、写実を通しての微苦笑をさりげなく定着させる。

そこに一つの転期があるはずである。檸檬や河鹿を見たリアルな目に、市井の貧しく生き死にする人間はどう映るか。晩年に読み耽ったというマルクス主義の文献は、彼の芸術観をどう変えるか、あるいは変えないか。「のんきな患者」一編では、その後の彼の推移を占うことはできない。

だが、そのあとに彼の作品はない。彼は三十一歳で死んで、青春の思惟と情感を密閉した二十編の短編を残したただけだ。かくて梶井基次郎の文学は永遠の青春の書となった。彼の青春は怠惰でもあり真摯でもあったが、そこから生み出されてきた美しい作品の数々の下には、その培養剤として、結核に冒された肉体が埋められていた、と私はいいたいような気がする。

2

梶井基次郎の処女作を「檸檬」とするなら、それが発表されたのは1925年の1月『青空』創刊号にであるから、最後の作品「のんきな患者」(1932年1月『中央公論』)に至るまで、梶井の創作活動の期間はわずかに七年、作品の数は未定稿として残されたものを除いて二十編、すべて短編である。梶井における湯ヶ島時代というのは、期間的にいっても、作品の配列上でも、ほぼその中間に位置している。

梶井は1926年12月31日に伊豆の湯ヶ島温泉へ出かけ、その夜は落合楼に泊るが、同地の湯本館に投宿していた川端康成の口ききで、翌日の1927年1月1日から湯川屋に泊ることになり、初め一、二ヶ月のつもりが、結局一年四ヶ月余の長逗留になる。このとき梶井は東京帝国大学文学部英吉利文学科に籍を置

く学生であり、二十五歳であった。

それほど豊かでもない学生の身分で、梶井がなぜ温泉地にやってきたのかといえば、それは単純に病氣静養のためであった。医師から「左右肺尖左右肺門がわるく右の方にラッセルがきこえる」と診断され、「転地と食餌養生をすすめ」られていたからである。

梶井は十九歳のとき肋膜炎にかかり、あるいは肺尖カタルの診断を受けているが、その後の放埒な生活で病氣を緩慢に、着実に進行させてきていた。それが、「東京へ来て二年越また痰に血が混るようになり」、秋から冬にかけて、慢性的な咯血状態に落ちこむことになるのである。

私の不養生もつまりは遊民的な生活の所産です——そんな結果私の病氣と生活とは親しくなりともにお互いを深めて来たやうです。然し私もこの四月からとにかく自活するやうに親からは云ひ渡されてゐますので身体も悪いままでは駄目です、身体よくなると共に氣持にも張りが出来、そして新しい生活を打ち建てたいと思ひます。(1927年1月2日付近藤直人宛書簡)

とはいっても、梶井は年末の二十八日締め切りの卒業論文は放棄しているのだから、三月の卒業は見込めず、四月からの自活といい、「新しい生活」といったところで、まるで雲をつかむような話だった。が、ともあれ、血を咯くからだは癒しておかなければならなかったらう。

梶井が温泉地として湯ヶ島を選んだのは、そこに、「伊豆の踊子」(1926年1、2月『文芸時代』)を发表した川端康成が投宿していたからにすぎない。梶井はこのとき川端とはまだ未知の間柄であったが、二歳年長の新進作家として、その目ざましい仕事ぶりに注目していたのであったらう。

少し経ってから、梶井は「ここへ来たのは

保養といふよりもっとせっぱつまった亡命といふやうな感じだった」(1927年2月3日付北神正宛書簡)と述べているが、亡命ならともかく、肺結核の保養のためには、湯ヶ島に限らず温泉地は適していない。保養の三原則、大氣、安静、栄養のうち、入湯は安静を犯すからである。

そのほか日光浴、病状をわきまえぬ過度の散歩、不眠、怠惰で不規則な生活、酒、煙草など、それらは温泉地のせいではなく、梶井自身の静養態度の問題であるが、彼は結核によくないことをあまりにこなすすぎている。そのために微熱は去らず、病状は軽快せず、焦燥ばかりが増してゆく。

そのうえ、梶井は寂しいものだから、『青空』その他の友人たちを手紙で呼び寄せ、彼らを歓待してはしゃぐ。友人たちが去ったあと、梶井は高い熱を出して数日を寝込む。夏頃から、川端を通して、湯ヶ島にやってくる文壇人たち、藤沢桓夫、宇野千代、尾崎士郎、広津和郎、萩原朔太郎らとの交流が始まる。

そんなふうな状態なので、梶井は二月に「冬の日」の続きを書いたほか、まとまったものは何も書けずにその年の秋を迎える。何も書けなかったについては、心身の不安定のほかに、『青空』の廃刊をも、その原因の一つに挙げておく必要があるだろう。それは、二年半にわたって、梶井の文学の拠点としてあったのだから。

十月に梶井は久しぶりに、古巣である京都と大阪へ帰った。京都大学で診察を受けているが、「右肺は掌大位背部が、左肺は肋骨ノ三枚目位まで胸部が悪い、ラッセルの音は種種、それから肋膜のすれあふ音がするとのこと、貧血、そしてまだ来春まで静養するやうに云はれた」(1927年10月31日飯島正宛書簡)という結果になる。

診断の結果によっては、梶井は湯ヶ島を引き揚げるつもりだったのかも知れない。が、

彼がひそかに恐れていたように、病状は確実に悪化していた。その診断は聴診によるものと思われるが、病巣が広範囲に転移し、活発に進行していることを示している。「来春まで静養」して、さてどうなるとも思えない。

そのうえ、大阪の実家では、梶井は母親に、毎月の仕送り七十円のうちの半分を自分でかせぐ、と約束している。当てはないけれども、少女小説でも書いて、知り合った文壇人のだれかに頼みこめば、何とかなるのではないかと考えたのだろう。むろん、梶井がいちばん書きたいものを書いて、それで原稿料が得られればそれに越したことはないが。

両親は随分老^(マ)ひばれた、僕は老年といふことを両親を通して眺めた、可愛さうだ、僕も早く独立してやらねばいけない、湯ヶ島にゐて創作に熱中することだけそれだけしか方法はない、一生懸命にやる、(1927年10月19日付淀野隆三宛書簡)

むろんそれまでも、梶井が焦りと寂しさに揺られていたとはいえ、まったく何も書いていないわけではない。たとえば五月七日付淀野隆三宛書簡には、「三つの短篇がみな二三枚のところでもまったままである」という一文が見られ、そのすぐまえの文章で、河鹿の交尾の話と、うすばかげろうのことが語られている。いずれものちに、「交尾」、「桜の樹の下には」として結実する素材である。

けれども、梶井が本気で、自分に課するものとして小説を書きはじめるのは、京都と大阪をめぐる十日あまりの旅のちである。同じ10月31日付の手紙で、北川冬彦には「今『闇』といふ短篇を書いてゐる、絶望に駆られた情熱、闇への情熱を書かうとしてゐるがうまくゆかない」と書き、飯島正には「寝ながら短篇を書いてゐるがまだ出来ない、作品の空気が一晩以上続かない、身体さへ続けばその一晩をおして書きあげるのと思ふ、身

体のことを気にしてゐては駄目だ」と書いている。

この二文とも、友に自分の覚悟のほどを語っているのだが、その本音はむしろ自分に対する景気づけにあったと思われる。書くという行為を半年ほど空白に置いて、さて覚悟ができたから書ける、というものではないだろう。旅から帰って病体は疲労しているにちががなく、むしろしばらくは書ける状態から遠くなっているはずだ。

そこで梶井は焦りから、「身体を気にしてゐては駄目だ」という気持ちを、ある夕の気まぐれによって行為に移す。十一月の初め、梶井は宿の人には告げず、来合わせたバスに乗り、天城峠で降りて下り三里の道を湯ヶ野まで歩いたのである。それは無謀であり、自虐であり、賭けでもあったろう。

しかし、この日の突発的な行動が、梶井に一つの転機をもたらし、そのあと「蒼穹」、「笈の話」、「器乐的幻覚」を書かせることになり、湯ヶ野行そのものも「冬の蠅」という作品にまとまる。結局、湯ヶ島滞在中に梶井が書いた作品としては、「冬の日」の続きを別にすれば、以上の四編に尽きる。

そのうち、「蒼穹」、「笈の話」、「器乐的幻覚」の四編は、いずれも四百字詰め原稿用紙にして六、七枚ほどの小品にすぎない。「器乐的幻覚」に至っては、この時期になぜ書かれたのか、そのモチーフの在りかを知るのに苦しむほどの作品である。たぶん、萩原朔太郎の推薦を当てこんでいるところから見て、朔太郎の詩の世界に近づけた試みなのであろう。

「蒼穹」、「笈の話」は、梶井のいう象徴主義的な作品なのであろうが、その自然観察はすぐれているとしても、「虚無」とか「絶望」とかの生硬な観念が唐突にはめこまれていて、「檸檬」の繊細、「城のある町にて」の清澄とともに失っている。手馴れたパターンで処理

しようとしている傾向があり、創造精神を回復する過渡の作品としか思えない。

3

一年四ヶ月余の湯ヶ島滞在で、梶井が直接に作品としてもものにした唯一の収穫は、約三十枚の短編「冬の蠅」だけである。この小説は、梶井の作品のなかで、いちばん私小説に近いものかも知れない。梶井にしては珍しく、激しい口調で、裸の心を語っているからである。

舐まれたからだに宿る鬱屈した心があり、その傷口は血を啗く肺のように、「墨汁のやうにこみあげて来る悔恨といらだたしさの感情」を垂れ流している。冬の蠅の「生きんとする意志」に触発されてか、「意志の中ぶらり」に挑戦するように、「定罰のやうな闇、膚を劈く酷寒」のなかに自分を押し出してゆく。

私は残酷な調子で自分を鞭打った。歩け。歩け。歩き殺してしまへ。

一夜の自虐的なアヴァンチュールを終えてみると、「私」には病状の悪化と憂鬱が残っただけだが、生きて冬の蠅の死を見とどけることができた。そこに「私」が運命的なものを感じたとしても、「陰鬱を加へてゆく私の生活」が終らないかぎり、「歩け」と自らに命じる意志は回復しているのである。

まことに「冬の蠅」は、文学の「意志の中ぶらり」に作動した起死回生の作であった。その後の病状の起伏からんで、梶井の創造への情熱は浮沈するけれども、「冬の蠅」から延びた線上で「のんきな患者」に出会うのである。リアリズムへの回帰、あるいは到達である。

けれども、私は「蒼穹」や「笈の話」をいちがいに否定するのではない。「僕は名匠に

なりたい、文学の神様になりたいと烈しく思った」(1927年3月18日付清水蓼作宛書簡)と書く梶井の意欲と実験が、その二作には感じられる。その頃梶井は志賀直哉に傾倒していたようだが、「ベテンや嘘のないアート」を志して、「事実の描写」に魅力を感じていたらしい。

それは、「視ること、それはもうなにかなのだ。自分の魂の一部分或は全部がそれに乗り移ることなのだ」(「ある心の風景」)という認識の深化と実践の試みでもあったろう。そして、湯ヶ島時代に、梶井が自らに課した作家としての修練は、写実精神の体得であったらうと思う。

梶井は湯ヶ島で自然を、植物や動物を細かく観察している。もともと微視的なものの見方や感じ方の強い人だが、梶井はそれを自然科学的であると同時に文学的に作り変えようとしているふしが見られる。その結果、聴覚的にも鋭さを増すが、視覚的に、とくに光と影と闇について敏感になる。

また、この時期、梶井の生活から少し離れたところでの影響として、一つには芥川龍之介の死が、二つにはプロレタリア文学の台頭がある。芥川の死についてはショックを受けたにはちがいないだろうが、詳しいことは分らない。一方、プロレタリア文学については、かなりの関心を寄せていることが、彼の手紙のなかに散見される。

それは、『青空』の同人のなかにも左翼転換の現象があり、中野重治の論文「四つん這ひになったインテリゲンチヤ」(1927年5月『辻馬車』)に感銘したことなどによるものだろう。だが、梶井は本気で納得するまでは、それまでの自分の文学にこだわる人であり、かんたんに自分を変えようとなしない。

然し僕の書くものは「生活へ」の反対で、その意味で正しい芸術ではなく「対症療法

的な芸術」でしかないのです。僕をして「生活へ」の芸術を書かしめよ。それがいつまでも書けないといふのは僕にとって非常に悲しいことです。(1928年3月20日付浅見淵宛書簡)

梶井はのちにマルクスの「資本論」を読み、「まあ早急な批評は避けるが、こんな面白いものはトルストイの『戦争と平和』以来だ」(1929年3月16日淀野隆三宛書簡)といっているが、そのことで梶井の作風が変ることはない。その頑固なところが私には好ましく思える。

ことごとに梶井は、写実精神の修練にして

も、自然観察にしても、あるいはマルクス主義思想の影響にしても、それらを内面に取りこむまでに時間のかかる人である。何ごとにも本格的に納得しようとするからであろう。

そしてそれらが萌芽的に現われてくるのは、最後の作「のんきな患者」においてである。死ぬ少しまえに書かれたものであるが、それまでの作品のように張りつめたものはないけれども、地を這うようなリアリズムで、貧しい人間の生き死にと、そこに自分の未来を投射して見つめようとするまなざしには、無限の闇のような可能性を感じさせるものがある。